書評

作業療法の曖昧さを引き受けるということ

齋藤佑樹，上江洲聖【著】

評者
酒向正春
ねりま健育会病院長／回復期リハビリテーションセンター長

表紙を見て，すぐ読みたくなった。「作業療法の曖昧さを引き受けるということ」を漫画で理解させるのか，凄く楽しみである。しかし，タイトルからして，何となく複雑そうな予感もした。

作業療法とは，人々の健康と幸福を促進するために，作業に焦点を当てた治療，指導，援助と定義されるが，作業がなんであるかがわかりにくい。私達の臨床現場で作業療法といえば，上肢戦略，生活戦略，精神・高次脳機能・復職戦略の 3 本柱の実践である。その実践には，患者との信頼関係の構築が前提となる。本書は，まさに患者との信頼関係の構築方法を丁寧に漫画と解説文で説明していた。まるで，ソーシャルワーカーの教育書ではないかと感じるほどに，患者の心と気持ちを大切にしていた。

本書の特徴は，患者のリハビリテーション入院という闘病生活の一瞬にどうかかわり，寄り添い，共に考え，人間力を回復させて，新しい人生を行くための作業の在り方に視点が置かれている。作業療法士は一人ひとりの患者，その人らしさを大切にした患者の理解者であってこそ，初めて作業療法という協働医療が可能になることを強調している。それは，作業療法が患者の幸福と健康に寄与するというリハビリテーション医学のベクトルが基盤であるためである。しかし，作業療法学で使う専門用語は少し小難しく，思考が複雑であった。この専門用語と解説を見ただけで嫌になることはないのだろうか。もう一段簡単に，漫画だけで描き上げてもよいのではないだろうかとも感じた。

本書の構成は以下の 13 章である。(1)患者とフラットに向き合う。(2)患者の情報と心理状態を理解する力を養う。(3)患者と協働し満足度を確認する。(4)患者評価はなぜ必要かを知る。(5)患者が望む地域に戻れることを一緒に考える。(6)患者の目標設定は己の力を知った上で巨人の肩に乗る（知恵を借りる）。(7)入院患者の心理からなぜ作業するかを学ぶ。(8)自宅退院には患者特有の環境と習慣を理解して社会資源を最大限に活用する。(9)もし目標設定が難しい場合も協働し真の理解者になる（逃げない）。(10)課題を解決するには患者に常に寄り添う。(11)その人らしさを大切にする。(12)その患者の大切な作業を共有する。(13)作業療法することで作業療法士になる。

リハビリテーション医も指示医ではなく，主治医でなくてはいけない。本書のニュートンの言葉（Column 4）にあるように，社会貢献は忍耐強い思考により達成できる。作業療法士は特に忍耐強い思考力が大切な職種で，それが治療に対する柔軟さを高めることを本書では学べる。

本書は作業療法の曖昧さだけでなく，リハビリテーション医療という臨床科学の曖昧さをも的確に説明する。このため，リハビリテーション医療にかかわる全ての職種に，作業療法士だけでなく，理学療法士，言語聴覚士，医師，看護師にとっても，患者との距離感や心理面が学べる漫画と解説書となっている。Back to the Basic. 患者とのかかわり方が気になる全ての医療従事者にお薦めの一冊である。

A5・248 頁
2023 年 10 月
定価：3,520 円
（本体 3,200 円＋税 10%）
[ISBN978-4-260-05057-9]
医学書院刊

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2024

2026/10/13 02:49:10